

福岡市埋蔵文化財調査報告書第537集

大谷遺跡群

－席田大谷遺跡群5次調査－

1997

福岡市教育委員会

序 文

福岡平野は古来より先達の生活の場であったようで、緊急発掘によって明らかになった遺跡も年ごとに数を増してきています。

席田大谷遺跡群は、これまでの調査によって弥生時代から古墳時代にかけての遺跡として知られています。ここに報告するのは東平尾運動公園の整備に伴って実施された埋蔵文化財の調査結果です。今回の調査で、弥生時代の墓地と古墳時代後期の円墳1基を確認することができました。弥生時代の墓群は集団墓の分布を知ることができました。なかでも古墳から出土した鉄器や装身具は当時の葬儀礼や装いの一端を示す貴重な資料です。将来この報告書が内外の文化交流に役立つことを期待します。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたりご協力いただいた関係者のみなさまに心より御礼を申し上げます。

1997年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

本 文 目 次

1. 調査の概要
2. 弥生時代の遺構と遺物
3. 古墳時代の遺構と遺物

例 言

1. 本書は、東平尾運動公園の整備に伴って発掘調査した福岡市博多区東平尾運動公園に所在する席田大谷遺跡群第5次調査の報告書である。
2. 調査は、福岡市教育委員会を主体に1994年度に発掘調査、1996年度に整理作業を行った。
3. 本書に使用する方位はすべて磁北である。
4. 遺構の実測は、調査担当者が行った。
5. 遺物の実測は、古墳の出土遺物を比佐陽一郎がおこない、弥生時代の遺物は担当者のほか是田教（福岡大学大学院）の助力を得た。
6. トレスは濱石正子・塙義久美子がおこなった。
7. 写真撮影は、遺構を調査者が、遺物を比佐が行なった。
8. 金属器類の保存処理は福岡市埋蔵文化財センターにて行なった。
9. 出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管の予定である。
10. 本書の執筆は古墳時代の遺物を比佐が行ない、編集を常松が行った。

遺跡調査番号 9421 遺跡略号 OTN-5 分布地図番号 東平尾 9 / 144

調査地地籍 博多区東平尾運動公園 調査面積 100 m² と古墳1基(席田大谷2号墳)

調査期間 1994年6月10日～94年7月28日

表紙上 墓群より福岡空港方面をのぞむ

下 席田大谷2号墳全景(南より)

1. 調査の概要

福岡市都市整備局公園建設課から東平尾運動公園の整備事業計画が出された。教育委員会埋蔵文化財課では、該地が席田大谷遺跡群に含まれることから、現地踏査を実施した。その結果遺構の古墳の存在が確認されたため調査を行なう方向で協議がもたれた。その後平成6年6月10日から発掘調査を開始したが、稀に見る異常気象で記録的な日照りがつづき、水不足のため夏以降、長期間の給水制限となった。調査区は水道もなく、めぐまれた条件とはいえないが、無事調査を終えることができた。調査区の位置については、席田遺跡群7（福岡市埋蔵文化財調査報告 第357集、1994）を参照のこと。

調査委託	福岡市都市整備局 公園建設課課
調査主体	福岡市教育委員会 埋蔵文化財課
調査総括	埋蔵文化財課長 荒巻輝勝・折尾 学（前） 埋蔵文化財第一係長 横山邦継
事前審査	主任文化財主事 濱石哲也 長家 伸
庶務	人江幸男（前）・小森 彰（現）
調査担当	埋蔵文化財第一係（当時）常松幹雄
保存処理	福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎 別府大学（現）本田光子
調査・整理参加者	池田由美・伊藤ミドリ・井上ムツ子・牛尾秋子・牛尾二三子・衛藤美奈子・ 菊池栄子・是田 敦・佐藤志津・懇慶トミ子・鳥井原良治・原美晴・ 平野義雄・船越恒人・堀ウメ子・堀本歳四郎・柳浦八重子・山西人美・ 脇坂レイコ

2. 弥生時代の遺構と遺物

標高50mほどの尾根の先端部で弥生中期の斂棺墓3基を確認した。福岡空港から中心部さらに糸島方面をのぞむ兆望のきく立地である。土質は花崗岩のバイラン土で、墳型は不明瞭である。3基とも斂棺の遺存状況はよくない。

1号斂棺墓（K-1）は、最も北側で検出された。単棺の成人用斂棺である。口縁部は断面形がいわゆる鶴先口縁で、口縁下に断面三角形、胴部に2条の「コ」字形突舌をめぐらす。膨らみ気味の肩部を有する中期後葉の立岩式の古段階に位置づけられる。

2号斂棺墓（K-2）は、尾根の先端部に位置する。合わせ口の成人用斂棺である。上蓋は朝顔状に閉口する広口壺の口縁部を打ち欠いたものである。胴部には断面が「コ」字形のシャープな突帯を回らす。下蓋の口縁部は、断面形がいわゆる鶴先口縁で、口縁下に断面三角形、胴部に「コ」字形のシャープな突帯2条をめぐらす。中期後葉の立岩式の古段階でもK-1に先行するタイプである。

出土状況の断面図は上蓋が下蓋の口縁下に位置しているが、口径の違いから本来は下蓋が呑口となっていたと推定される。

3号斂棺墓（K-3）は、K-2の南側で検出された。合わせ口の小児斂棺である。南から埋り込んでいる。斂棺は取上げの際、復原不能なまでに紐片となり凶化しえなかった。口縁部は断面形がいわゆる逆「L」字口縁で、中期後葉時期に位置づけられる。

同一の丘陵上で壺棺墓が検出されたのは今回が初めてである。もともと東側にかけて墓域が広がっていたものと推定される。今回検出した3基は削平を免れた西端部であろう。



図1 席田大谷遺跡群5次調査区位置図（縮尺1／1,000）

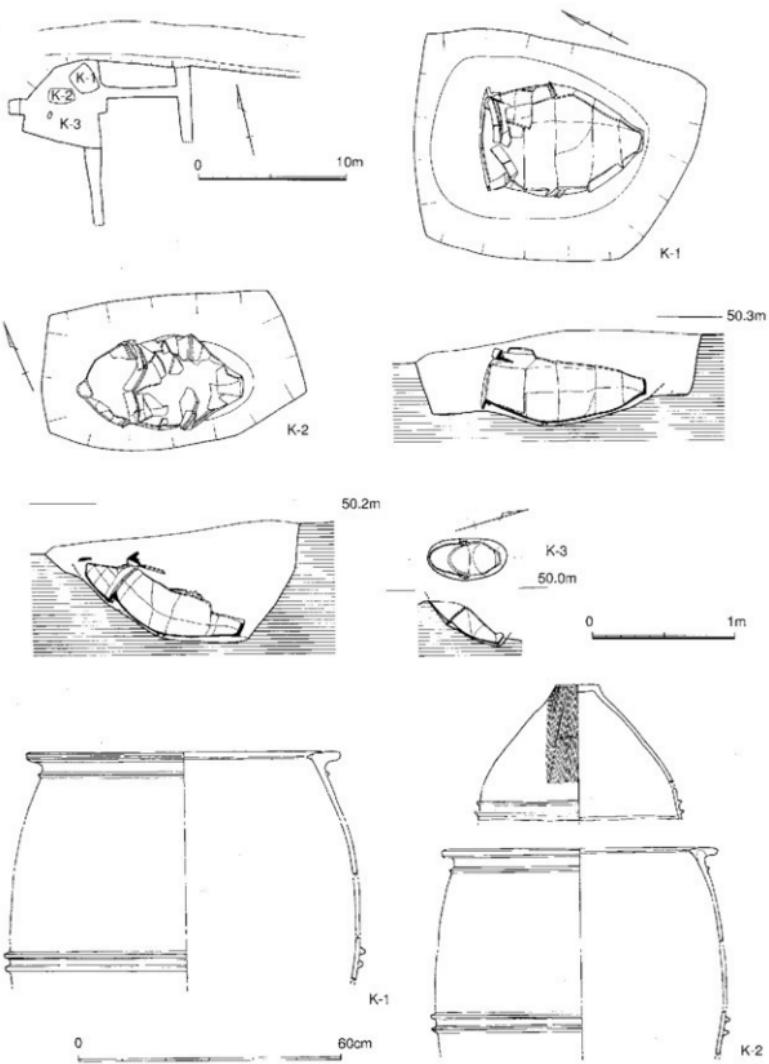


図2 墓格室 造構配置図・実測図（縮尺1/300・1/30・1/10）

3. 古墳時代の遺構と遺物

本古墳の分布地図における名称を席田大谷古墳群第2号墳とし、以下席田大谷2号墳と呼称する。古墳の現況は散策道によって削平を受けており墳丘は確認できない。花崗岩の矩形のプランが 3×2 mの範囲で確認できたため古墳の石室とみなし、掘り下げをおこなった。

墳丘の奥壁と西壁、前庭部の3か所にトレンチを設定した。土層観察から、墳丘は北側の尾根の高まりを利用して築かれた径約8m程度の不整形の円墳と推定される。黒色土と黄灰色土を互層に叩き締めているが、丁寧な版築ではない。

調査の結果、南側に開口する両袖式の平面プランの横穴式石室であることが明らかとなった。石室は奥壁や西壁で基底部を含め5段程度を遺存する。床面からの最大高は現況で1.35mである。玄室の長軸は1.95m、幅は玄門部が1.35m、奥壁で1.55mをはかり、床面には敷石を配している。玄門部を含めた基底部に大ぶりの石材を用いる。玄門の最大幅は45cmで、樋石の部分はわずかに高まりがみられる。

出土遺物は、すべて玄室内で検出された。とくに装身具と鉄器が豊富である。奥壁の東隣では着装時の状況をとどめて、ガラス玉や耳環が出土した。耳環の数からして数次の追葬があるが、頭部は奥壁に向けていたと考えられる。

副葬遺物のうち土器の出土が少なく、完形に近いのは玄室の東南隅で出土した短頸壺のみである。

古墳は散策道を巡回させることによって、現状保存されることになり、石室内に土嚢をいれて埋め戻しをおこなった。

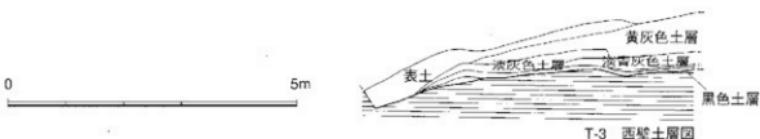
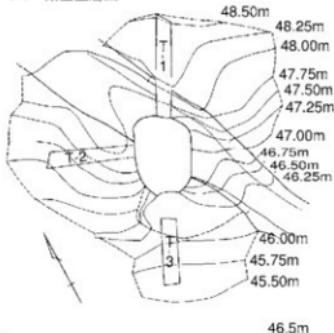
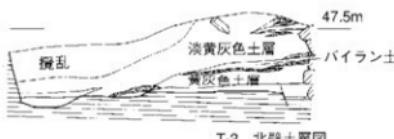


図3 席田大谷2号墳 墳丘実測図 (縮尺1/200・1/80)

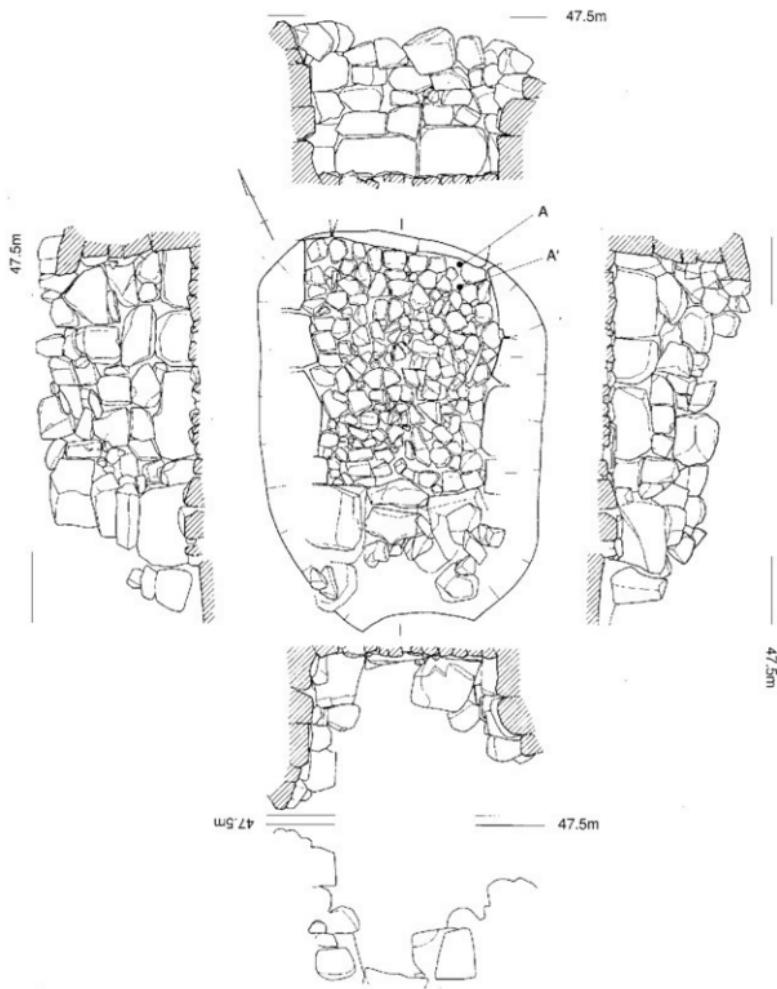


図4 廉田大谷2号墳 石室実測図(縮尺1/40) A・A'は図5の実測ポイント

出土遺物

本墳より出土した遺物は以下の通りである。

土器(図7)

須恵器で形状の分かるものは石室左袖部分から出土した短頸壺と壺蓋があるのみで、他は大甕等の破片数点にすぎない。壺は全高9.7cm、胴部最大径14.6cmを計り、表面からは頸から肩が回転ナデ、底部は回転ヘラ削り、その間にカキ目が施されている。壺蓋は、かなりの小片から図上復元を試みている為径は不確実である。

装身具(図8・9)

耳環は金環(1~5)と、銀環(6~9)、そして銅のみの銅環(10~13)がある。金環、銀環は中実の鋼胎に金、銀の薄板をかぶせた構造である。金環の1と2、3と4、銀環の6と7、8と9、銅環4点のうちの2点はその形状と構造の類似性より対になるものと思われるが、残りには対になるものが見られない。大きさ等は一覧表を参照されたい。

玉類には様々な材質、色調のものが混在している。これらを整理分類すると、硬玉製勾玉1(14)、碧玉製勾玉1(15)、水晶製切子玉1(16)、石製管玉5(17~21)、石製小玉1(22)、琥珀製丸玉1(23)、土製丸玉1(24)、瑪瑙製丸玉3(25~27)、ガラス玉95(28~106)となる。ガラス玉は色調により更に黄色系(透明のものが変色?)、緑色系65、水色系23、緑色系6に分類できる。また、その形態によっても分類が可能になるものと思われるが、紙幅の関係上詳細は一覧表に譲る(ガラス玉の一部には土ごと取り上げた状態のものが16点あり、これらは今回図化していない。)

なお装身具については、出土状況を見ると被葬者の頭部にあたる部分の搅乱は免れたようで、それによれば正顎に二つまとまりがあることが分かる。一つは勾玉を中心とした首の部分、もう一つは二つの耳環を結ぶラインの上にあり、首飾りと髪飾りと考えられる。(図5)

飲食品(図10・11)

農工具

1は鉄製の鋸である。古墳の出土品としては金剛的にも比較的珍しいもので、福岡平野でも数例の出土に限られる。數片に割れており図化した以上に接合しないものの、同一個体と考えて良いであろう。現存する破片の長さの合計は23.2cmを計る。刃は両側に付き個々の刃は二等辺三角形を呈する。押し切り、引き切りの区別が分化する以前の所産と考えられる。図中右端の破片は破断面が無く、ここが端部と思われるが、なんとも不可解な形状である。

2は鉄鎌である。ほぼ完形に復元され、全長12.7cmを計る。木質の付着は見られない。

刀子はほぼ全容の分かる5点以外に数点の破片がある。3~5には貴金属が、また3の柄には木質と思われる有機質が遺存する。12は茎の太さ等に違和感があるが、刀子に含めている。骨片が付着している。全点見ても刃部に有機質の遺存するものは無い。

武器

13は全長約40cmの刀で短刀と言って良いであろう。中央部で曲がっており、刃部や茎の各所には木質が見られる。また茎には木質の下に纖維状のものを巻いた痕跡があり、柄の下に滑り止めの糸巻を施したものと推測される。



図5 装身具出土状況(1/4)

鉄錆は大きく分けて長頭錆と広根錆があり、長頭錆は関部で数えて11本分、広根錆は同じく5本分が確認できる。この他錆身や茎の破片でどれにも接合しないものが数点ある。長頭錆はその多くが柳葉形で、広根には三角形式(28)、方頭斧箭式(29)、主頭斧箭式(30)等がある。

その他

不明鉄製品(39)は鎖状を呈している。

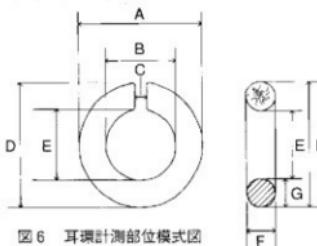


図6 耳環計測部位模式図

No.	材質 芯材	表面	計測値(mm)						
			A	B	C	D	E	F	G
1	銅?	金箔板	26.50	14.70	2.00	24.60	13.50	5.40	5.40
2	銅?	金屬板	27.00	15.50	1.50	24.00	13.50	5.50	5.50
3	銅	金箔板					3.80	4.00	3.80
5	銅?	金箔板	23.50	13.50		21.50	13.00	3.90	3.80
6	銅	銀薄板	33.00	18.20	1.70	29.00	14.80	7.10	7.30
7	銅	銀薄板	32.50	18.20	2.00	28.20	16.80	7.20	6.80
8	銅	銀薄板	31.00	17.00		26.50	14.00	7.35	7.00
9	銅	銀薄板	33.00	18.50	2.00	29.00	14.50	7.70	7.50
10	銅	銀	26.00	17.00		24.20	16.00	4.30	5.00
11	銅	銀	26.00	16.30	2.00	22.50	15.00	4.00	4.30
12	銅	銀	27.20	18.00	2.00	24.80	16.00	4.25	4.10
13	銅	銀							3.00

表1 耳環計測表

No.	色調	形式	最大径	最小径
28	灰色系	B	7.90	6.00
29	褐色系	B	10.00	7.65
30	褐色系	Aa	8.25	6.75
31	褐色系	C	9.00	1.90
32	褐色系	B	9.75	6.65
33	褐色系	D	8.90	7.10
34	褐色系	C	9.05	4.40
35	褐色系	B	9.65	5.30
36	褐色系	Aa	8.60	6.20
37	褐色系	Aa	8.00	6.20
38	褐色系	Ab	8.00	5.85
39	褐色系	Aa	8.55	5.85
40	褐色系	Aa	7.40	6.60
41	褐色系	Aa	7.50	4.70
42	褐色系	Aa	7.15	4.75
43	褐色系	Aa	7.60	5.65
44	褐色系	Aa	7.90	6.75
45	褐色系	Aa	6.80	6.10
46	褐色系	Aa	7.36	6.60
47	褐色系	Ab	7.55	4.90
48	褐色系	Aa	7.30	5.15
49	褐色系	Ab	6.85	5.70
50	褐色系	Aa	6.70	7.10
51	褐色系	Aa	7.05	6.65
52	褐色系	Aa	7.45	5.10
53	褐色系	Aa	7.10	6.40
54	褐色系	Ab	6.85	5.90

No.	色調	形式	最大径	最小径
55	褐色系	Aa	7.40	5.20
56	褐色系	Aa	7.29	5.40
57	褐色系	Aa	6.65	6.30
58	褐色系	Aa	6.70	3.95
59	褐色系	Aa	6.00	3.75
60	褐色系	Ab	7.00	5.60
61	褐色系	Aa	7.70	5.30
62	褐色系	Aa	6.95	3.60
63	褐色系	B	6.85	5.25
64	褐色系	B	6.65	6.60
65	褐色系	B	6.70	4.95
66	褐色系	Ab	7.00	5.25
67	褐色系	Aa	6.90	5.10
68	褐色系	Aa	6.45	5.15
69	褐色系	Ab	7.30	6.10
70	褐色系	Aa	6.70	1.25
71	褐色系	Aa	5.85	2.55
72	褐色系	B	5.85	4.85
73	褐色系	C	6.00	4.95
74	褐色系	B	4.80	4.90
75	褐色系	Aa	5.85	3.60
76	褐色系	B	3.95	2.90
77	褐色系	B	3.50	3.10
78	褐色系	B	3.40	3.35
79	褐色系	B	4.05	3.90
80	水色系	B	5.70	3.15
81	水色系	B	5.30	2.80

No.	色調	形式	最大径	最小径
82	水色系	Ab	4.80	4.00
83	水色系	B	4.15	3.30
84	水色系	B	4.25	2.90
85	水色系	Aa	5.55	3.00
86	水色系	B	3.75	3.30
87	水色系	B	4.45	2.75
88	水色系	Ab	4.40	3.00
89	水色系	Aa	4.20	2.60
90	水色系	B	3.80	2.90
91	水色系	B	4.80	2.80
92	水色系	B	3.55	2.30
93	水色系	B	4.30	2.00
94	水色系	B	3.55	2.25
95	水色系	D	3.80	2.00
96	水色系	Aa	3.30	2.30
97	水色系	Aa	3.35	2.60
98	水色系	B	3.55	2.10
99	水色系	Aa	3.70	2.70
100	水色系	B	3.55	1.90
101	褐色系	Aa	5.00	4.20
102	褐色系	Ab	4.70	3.55
103	褐色系	Ik	3.50	3.50
104	褐色系	Aa	2.50	3.00
105	褐色系	B	4.65	2.45
106	褐色系	Aa	4.00	2.70

表2 ガラス玉計測表



図7 古墳出土須恵器実測図(1/3)

ガラス玉はその形状から以下のように形名分類ができる。

a:穴の形が正円もしくはそれに近く、径1mm程度。

b:穴の形が橢円もしくは不規則で、aに比べて径が大きい。穴の縁は、内側もしくは彼が付く。

c:穴の底面に凹凸がある。

d:表面に気泡による網状かげ形が見られ、ザザサしている。

e:墨書き上げの板縫が見られる。

これらは形態あるいは工芸的面で異なった方法が用いられたことに基づくものと考えられる。

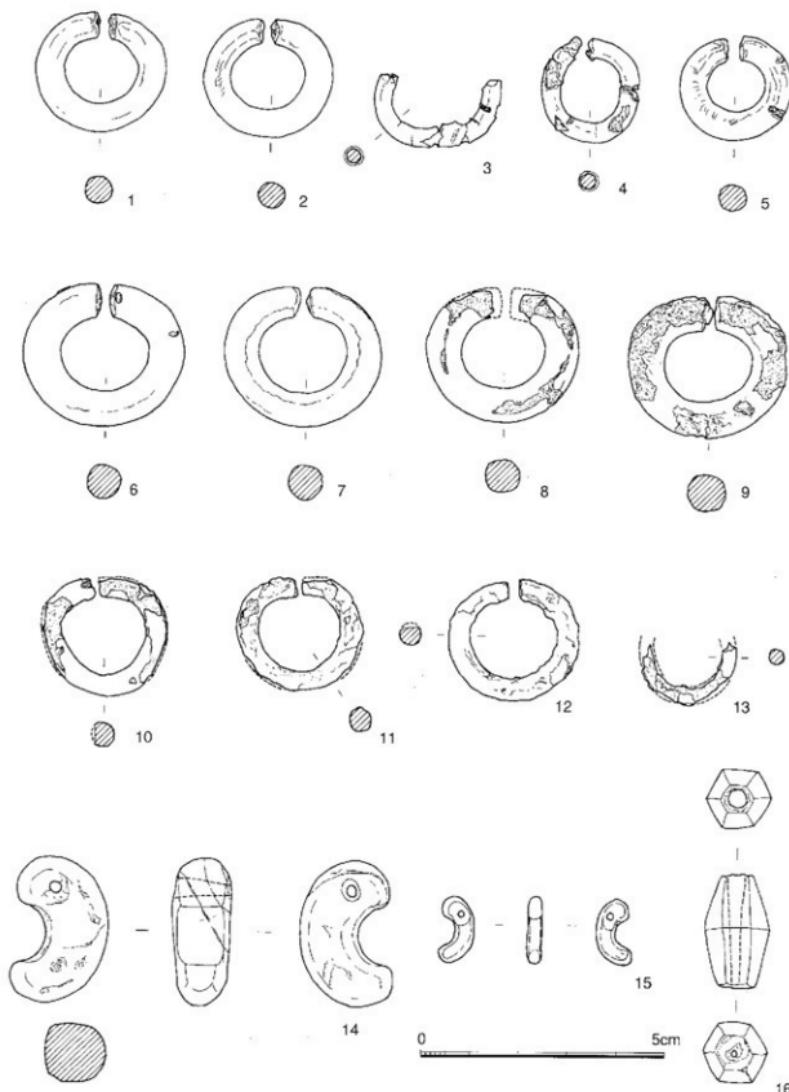


図8 席田大谷2号墳 出土装身具実測図1 (縮尺 実大)

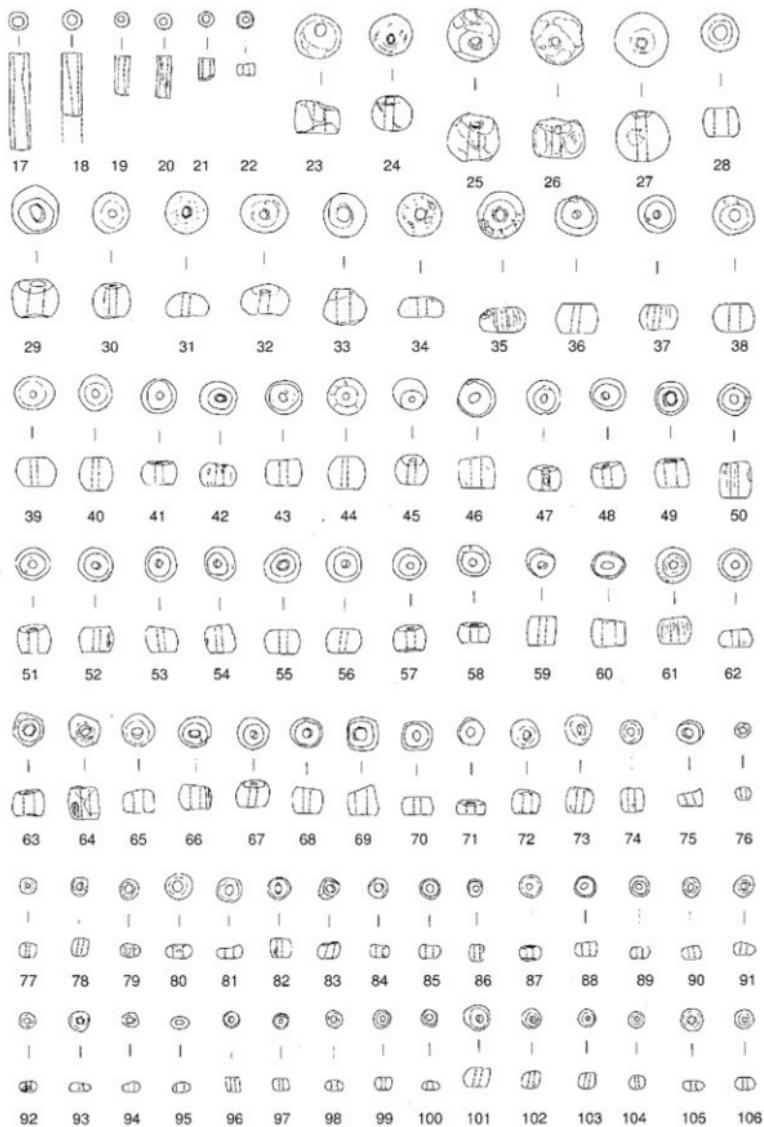


図9 席田大谷2号墳 出土装身具実測図2 (縮尺 実大)

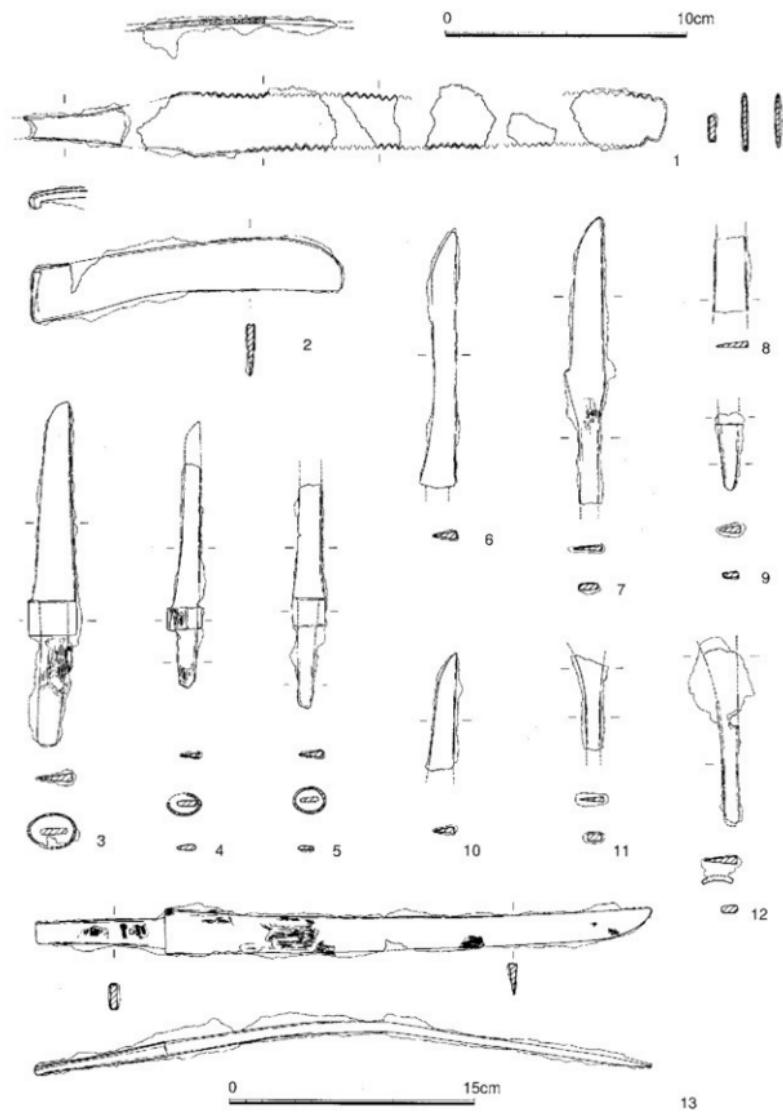


図10 席田大谷2号墳 出土鉄器実測図1 (縮尺 1/2・1/3)

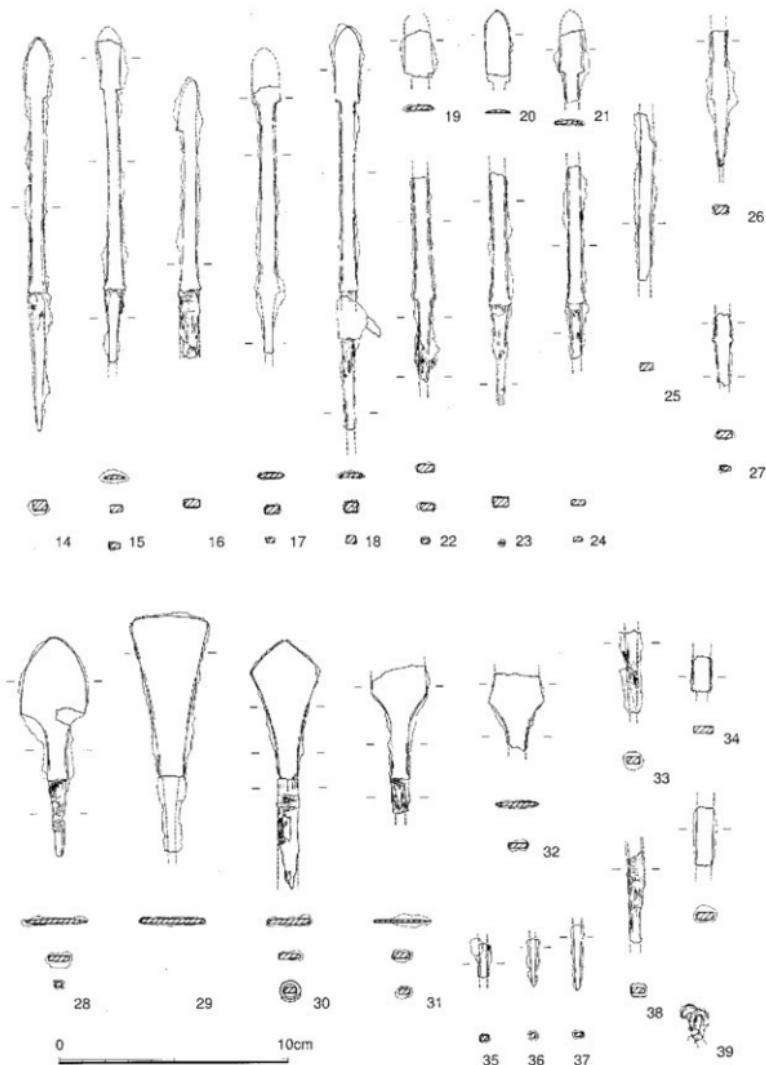
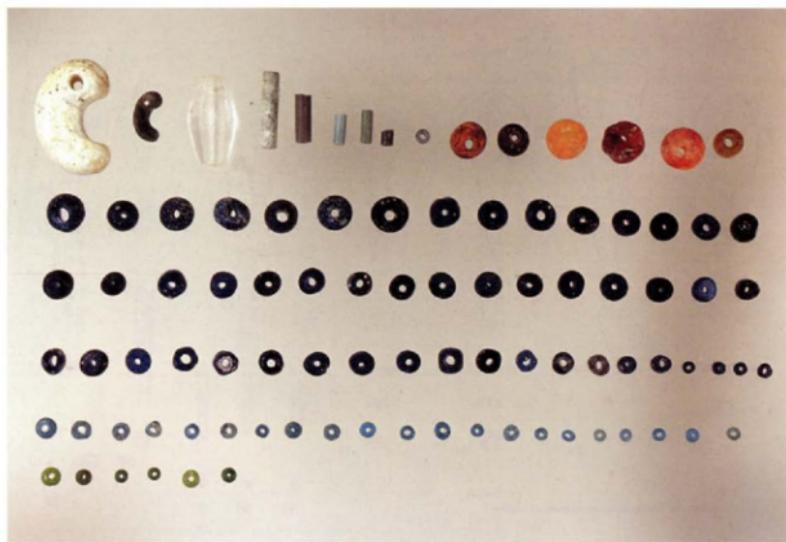


図11 市田大谷2号墳 出土鉄器実測図2 (縮尺 1/2)



席田大谷2号墳 出土装身具1



席田大谷2号墳 出土装身具2



席田大谷 2 号墳 出土遺物

The Mushiroda-Otani Ruins 5th.
 The Board of Education of Fukuoka City
 1997,March



1号墓（西より）



2号墓（東より）



席田大谷 2号墳石室（北より）



席田大谷 2号墳石室（南より）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第537集

大谷遺跡群 1997年3月31日

—席田大谷遺跡群5次調査—

編集発行：福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課
〒810-0092-711-4667印 刷 所：株式会社博多印刷
福岡市博多区須崎町8-5
☎092-281-0041